

意見陳述書

平谷敬子（東温市在住）

私は 40 年あまり、東温市に住んでいます。

東温市は伊方原発から北東約 60 km に位置していて、日本のどこにでもある里山、人口 3 万人あまりの小さな市です。

石鎚山系の山々は冬になると雪を抱き、春になると重信川の河川には桜が咲き並びます。夏には棚田の稲が青々と育ち、秋にはあちらこちらで葉が色づき里山を染めていきます。

そして、私が特に好きな場所は重信川のほとりにある泉です。伏流水が湧き出た泉の周りには木々が茂り、野鳥が集い、湧き出た清らかな水は田畑を潤して行きます。

どこにでもあるような里山、でも私にとってはかけがいのない場所です。障害のある長女を育てていた時、理不尽な言動に涙を流したときもありますが、明るく活発な次女と長女との優しく寄り添う姿に勇気づけられ、多くの友人に支えられて過ごしました。そして、市内の施設に住む長女と夫とこの場所でささやかでも穏やかに暮らしていきたいと願っています。今回、意見陳述をするにあたり、「日頃の生活に追われ、デモや活動には参加できないけれど、原発を止めてほしいと願っている人はたくさんいることを伝えてほしい」と友人から託されました。友人の願いも同じなのです。

私は、重い障害がある娘と暮らしていく中で、重い障害がある人も、親亡きあとも安心して暮らすことができる社会にしたいと、「重症心身障害児（者）を守る会」に入り、長らく愛媛県支部の事務局を務めました。その活動は私の生活の大半を占めるようになり、東日本大震災当時、54 基もの原発が造られていたことや、伊方原発で MOX 燃料を使ったプルサーマル発電が進められていたことについても深く考えることもなく、1986 年に起きたチェルノブイリ原発事故も遠い異国の過去の出来事になっていました。まさか、自分の国、この日本で原発事故が起きると夢にも思っていなかったのです。

2011 年 3 月 11 日、東京電力福島第一原発事故が起こり、原発の建屋は次々と吹き飛ばされ、広島に投下された原子爆弾 168 発分の放射性セシウムは、広大な地域の山林や農地を汚染しました。

放射性物質が飛散していることを知らされなかった人々は、臭いも音もなく見えない放射性物質に気づくはずもなく被曝しました。しかし、国は、すぐには避難指示を出さず、「直ちに健康には影響はない」と発表し続けました

私は、このような大事故が起きたにも関わらず、原発が再稼働されることは決してあってはならないとの思いから原告に加わりました。

福島原第一原発事故によって多くの人が思い描いていた人生は、日々の生活を根こそぎ奪われ絶望と悲しみの困難な人生に変わってしまい、伊方原発で事故が起これば、その周辺で生活する私や家族にも同じようにふりかかることであり、決して他人事ではありませ

ん。

私は、そのことを多くの書籍や被害者と直接出会い学びました。

写真集「浪江町津島 風下の人びと」を読むと、故郷を奪われた人たちの、11年たっても、生まれ育った家、家族と育んだ思い出の家に戻ることもできず、友達や地域の人たちと分断され、経済的な基盤も壊され、子ども達を被曝させてしまったと悔やみ、子どもや自分たちの健康に不安を抱きながら、辛い生活を強いられている人たちの心の叫びが聞こえてきます

「子ども脱被曝裁判 意見陳述集」に於いても、子ども達を守れなかった悔しさ、データを隠蔽し住民の避難に活かさず、子ども達に無用な被曝をさせた、福島県や国への怒りが伝わってきます。子ども脱被曝裁判から明らかになってきたことは、甲状腺がん多発という内部被曝の悲しい実態でした。

私が出会った福島県双葉郡川内村から愛媛に避難していた青年が、2020年、19歳で自ら命を絶ちました。避難してきた頃は小学生でした。彼が何故死を選んだのか軽々しく推察することはできませんが、福島第一原発事故によって彼と家族の人生が狂わせられて、強いられた避難生活のなかで起こったことは事実です。彼のお父さんは、原発事故さえなければこんなことには、という無念な思いをこれからも持ち続けるでしょう。お父さん、お兄さんと三人が寄り添い、支えながら暮らしていた彼を私は忘れません。

また、昨年10月、甲状腺がんで亡くなられた飯館村の元酪農家の長谷川健一さんにもお目にかかりました。愛媛に来られて、「飯館村の、福島の実態を知ってほしい、「までい」な村だった飯館村はもう戻ってこない。雨が降ると空間線量が下がるんだ。でもしばらくすると又高くなる。風が運んでくるんだ。」と悲しそうに話されていた姿を思い出します。「までい」とは、手間暇を惜しまず、ゆっくりと丁寧に生きる、という福島の方言だそうです。長谷川健一さんは、息子さんたち家族と共に生活し酪農を営むという以前の暮らしを再開することができませんでした。

どんなに事故の前の生活に戻りたいと願っても、故郷に戻って家族と暮らしたいと望んでも叶わないまま、「原発事故さえなかったら」と、失意の中で亡くなっていった人、その人達の辛さ、悲しみの声が響いてきます。

原発事故は、ささやかな人々の暮らしをズタズタにして奪って行きました。

しかし、国や東電は、福島の人々の苦しみに真摯に取り組もうとはせず、責任をとろうとはしません。

そればかりか、国は、避難者に対し表土をはぎ取り除染したから戻れと命じ、避難者への支援策を次々と打ち切っています。放射能の基準値を上げた地域に住むということ、子どもや妊婦に強いということ、命を軽視しているとしか考えられません。

帰還困難区域が解除され住民が戻っていると報道するメディア。しかし、空間線量の値も土壌汚染の実態には何も触れません。

国会事故調（東京電力福島原子力発電所事故調査委員会）の報告書において、この事故が「人災」であることは明らかで、歴代及び当時の政府、規制当局、そして事業者である東京電力による、人々の命と社会を守るという責任感の欠如があったこと、そしてこの経験を無駄にしてはならず、国民の生活を守れなかった政府をはじめ、原子力諸機関、社会構造や日本人の「思い込み（マインドセット）」を抜本的に改革し、この国の信頼を立て直す機会は今しかないこと、そして、事故の直接原因は、地震及び地震に誘発された津波という自然現象であるが、事故が実際どのように進展していったかに関しては、重要な点において解明されていないことが多いこと、その理由の一つは、本事故の推移、直接関係する重要な機器・配管類のほとんどが、この先何年も実際に立ち入ってつぶさに調査、検証することができない原子炉建屋及び原子炉格納容器内部にあるためである、と報告されています。

国や電力会社は事故の原因を解明したのでしょうか、できるのでしょうか。今も書類上の審査のみ済ませ原発の安全性が保たれていると言います。

何一つ解決されていないのに、本当に原発は安全ですか。

事故はもう二度と起こらないと言い切ることができるのですか。私は不安を拭い去ることができません。

私達が想像できないほどの大きな地震が南海トラフや中央構造線で起きると言われています。

一度伊方原発で事故が起こり、風下になれば私の住む東温市も瀬戸内海も、九州までも放射能に汚染されるでしょう

そこに暮らす人々、施設や病院に居る人たち、子ども達はどこにどうやって避難するのでしょうか。大熊町の双葉病院のような悲劇がまた繰り返されるのでしょうか。

もう二度と放射能によって苦しみ悲しむ人々をつくらないためにどうか原発を止めてください。

私達の社会、日本が変われる機会を与えられているうちに、同じ過ちが繰り返されないうちに、司法が誤った方向に向かっている国を正してください。

私達はこの国の司法は生きていと信じています。